The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近年における中日両国の対外意識に関する研究動向 : 清末幕末の遣外使節と海外留学生を中心に
Author(s)	王, 賓
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1989, 23, p. 25-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56532
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

近年における中日両国の対外意識に関する研究動向

── 清末幕末の遣外使節と海外留学生を中心に ──

王　　賓

一

中日両国が19世紀後半以後それぞれ異なった近代化の道を歩んできたことは周知の事実である。その原因の究明は，中日両国を始め世界の歴史学者によって，両国の政治体制，経済基盤，文化背景，国際環境など多方面にわたってなされてきたのである。これらは確かに大変重要な問題である。しかし，毛沢東氏がかつていったように，「外因はことの変化の条件であり，内因はことの変化の根拠である」[1]。19世紀中葉の両国の対外認識の相異は，両国の異なった歴史的経験を解く上でより重要な意味を持っているのではなかろうか。

このことは既に早くから芝原拓自氏によって指摘されている。氏はその大著『日本近代化の世界史的位置 ── その方法論的研究』（岩波書店1981年）の中で次のように述べている。「1860年以後における日中両国の国内変革と対外的対応の如何は，両国のその後の運命を左右する死活的な重要性を持っていた。なぜなら，1860年以降の「外圧」の主要形態の転換は……一方では従属的諸民族の選択と対応の幅をより大きくしていたからである。」しかし，その「国内変革と対外的対応」が両国の対外認識と密接な関係を持っていたことは言うまでもない。すなわち，両国の当時の国際情勢や外国事情への認識や判断は，その対外行動の方向を決め，また逆にそ

れを「プラスの目標或はマイナスの教訓」[2] として国内変革に生かしていると思われるからである。

これほど重要な意味を持つ両国の対外意識は，しかしながら，その比較研究において必ずしも満足できる状態とは言えない。[3] 例えば，多くの論者が指摘しているように，両国の対外意識の変化は，中国の場合は，天朝思想——「師夷之長以制夷」——「中体西用」——維新変革——「五四運動」——侵略抵抗，また日本の場合は，華夷意識——「夷をもって夷を制す」——「東洋道徳西洋芸術」——維新開化——脱亜入欧——対外侵略，といった道を辿ってきたが，しかしそれはいつ，何を契機に変化が見られたか，また国内の変革と対外的行動にいかなる影響を与えたか，などについては必ずしも明瞭な答えがでていない。

さて，上に述べた中日両国の対外意識の変化を比較するには多くの課題が残されている。例えば，清朝の洋務派（曽国藩，李鴻章など）と幕府の改革派（岩瀬忠震など）の比較などがある。しかし対外観の変化が最もはっきり現れていたのは，19世紀後半中日両国から欧米へ派遣された使節団の人々や留学生たちである。彼らの多くは西洋社会で全く新しい体験をし従来の伝統意識を修正か廃棄するに至ったのである。また西洋社会の現実をこの目で観察し，世界資本主義体制の中で自国をいかに発展させるかという緊急課題についてそれぞれの結論を出したのである。そして帰国後彼らの多くは政府や知識界で重要な位置を占め，両国の近代化に多大な影響を与えたのである。だから彼らが西洋で何を，またどのように見聞し，そしてその意識がどう変わったかを研究しさらにそれらを比較することは，両国の近代化の差異を理解する上で一つの重要な手がかりとなると考えられる。

ここでまず両国の使節団や留学生に関するこれまでの研究成果を整理し，これからの研究の下準備にしたいと思う。その際，使節団研究と留学生研

究とに区別してみることにする。その理由は使節団の場合は，外交任務を帯びた政府の代表としての西洋視察であって期間がたいてい短く，またメンバーたちは集団生活の中でいろいろな意味でその行動が束縛されている。彼らがみた西洋はショーウィンドー的な側面が強い。一方留学生たちは，より長い期間で西洋社会で日常的な生活を経験し，さまざまな場面で西洋人と接触し西洋社会を深く理解する条件を有し，それゆえ個々人の意識変化もより顕著に現れてくる。もちろん両者が残した史料の性格も違う。また，西洋へ行く使節団や留学生の歴史が長いが，私はここで年代を限定したいと思う。すなわち日本の場合は，万延元年から明治10年代の前半，中国の場合はアヘン戦争以後から辛亥革命までとする。下限をこのように決めるのは明治4年の岩倉使節団が近代日本の対外観の原型を作り出し，それ以後の留学生の派遣も幕末のそれとは性格的に大きく変わっていたし，清朝の「五大臣欧米視察」までの中国人の西洋認識をみればその意識の変化の軌跡を辿ることができ，留日学生運動をもって留学生の量，質とも最高に達したと思われるからである。[4)]

二

万延元（1860）年から明治4（1872）年にかけて日本は数回にわたって西洋諸国へ使節団を派遣した。それぞれの使節団が独自の外交任務を帯びていたことはいうまでもないが，「夷情探索」——西洋諸国の視察は大変重要な共通の使命となっていた（この特徴は中国清末の遣外使節にも見られる）。使節団のこのような「夷情探索」の成果は，公式報告書，個人の日記などの形で世に残っている。これらの史料から幕末明治初期の日本人の対外観の変化を窺うことができる。

さて，幕末の対外使節の派遣についての政策史的な研究は早くから大塚武松『幕末外交史の研究』（宝文館昭和27年），石井孝『増訂明治維新の

国際的環境』（吉川弘文館昭和41年），尾佐竹猛『夷狄の国へ――幕末遣外使節物語』（万里閣出版昭和4年）などの著作がある。また比較文化史的見地から芳賀徹氏の研究がある。[5] しかし使節団の対外意識を本格的に取り上げたのは松沢弘陽氏の「さまざまの西洋見聞――「夷情探索」から「洋行」へ」（『西洋見聞集』岩波書店日本思想体系昭和49年）といわなければならない。氏は論文で「古い体制の最後の局面で西洋経験の衝撃を通じて思想の急激で深い転換を経験した人々の多くは，新しい政府の成立とともにいち早く西洋文明導入の水路を築く事業に着手し，彼らの方針，彼らの態度はその後の西洋文明との接触，西洋文明の摂取のあり方を規定するに至った」と述べ，幕末に渡航した人々の意識が近代日本の対外意識に与えた影響は大であることを強調した。氏は万延元年から慶応3年までの一連の使節団派遣のプロセスから幕府の組識的な「西洋探索」への変化を解明し，それぞれの使節団の特徴や相違を分析し，幕末日本人の西洋理解の深化を見出した。例えば，西洋の先進的な技術に対して，遣米使節団はただ感心するだけであったが，文久の遣欧使節団に至ると，すでに一部分の人々（福沢諭吉の如く）はそれを支える国家制度，社会組織の存在を読み取った。また西洋関係の理解については，遣米使節団は西洋列強の相互関係を支配する原理について殆ど知ることがなかったが，文久の遣欧使節団の場合には事情が大きく変わっていた。即ち「列強国の共通の法に従う対等の友好関係や自由貿易の勝利が報告されている反面，使節団メンバーの私信には殆ど例外なく権力政治への警戒と日本の独立についての危機感が語られていた」と彼は指摘した。そして氏は使節団メンバーの日記を丹念に読み，とくに従者玉虫左大夫と副使村恒範正の西洋観を比較しながら初めて西洋社会に接触した彼らの意識変化を探った。つまり強烈な「有志者」意識をもって遣米使節団に加わった玉虫は，その初期のアメリカ観が当時一般的だった夷狄観そのままだが，三か月間の航海生活によるアメ

リカ水兵との日常的な接触を通して，さらにアメリカ到着後の彼の積極的な観察を通じてアメリカの文化や政治，社会体制一般の特質についてそれまでと違った解釈方法を試み，自国の体制にも批判の目を向け，ついに夷狄観を捨てるに至った。ところが，村恒範正の場合は時にはアメリカでの見聞を新鮮に覚え，率直に感心しながらも自国とアメリカについての考え方そのものを修正するに至らなかった。せいぜい西洋の文物を全面的に拒否する夷狄観から技術的なことについて採長補短の余地を認める夷狄観へと変わったぐらいである。さらにこの論文で松沢氏は，福沢諭吉の西洋理解を具体的に分析し，それが最も優れていることを高く評価している。つまり福沢が自らの西洋体験を通じて西洋列強の弱肉強食と平等友好の両側面を正しく捉えた上で開国を主張したのである。松沢氏は福沢の西洋「巡行」と彼の政治意識の成長との関係を見事に解明してくれたのである。

以上の分析を踏まえて氏は，幕末渡航した人々の思想転換の過程を類型化し，それを「既に18世紀末蘭学の影響を受けた先駆的な知識人の経世論に始まって数十年の間徐々に進んできた世界像の転換と新しい体制の構想の運動の一コマ」とし「西洋世界との直接の接触という初めての経験の中で夷狄観という伝統的な世界像がゆすぶられ，西洋諸国の国際関係の現実に目が開かれ，またそれに伴って自国の伝統的な秩序に対する深刻な懐疑と反省そして新しい体制の模索が始まる過程」と位置づけた。私は氏のこの論文を(1)対外意識を中心に論証したこと(2)対外観の変化を幕末西洋観の転回，そして明治維新ないし近代日本と関連させて考えていること(3)福沢の政治意識の成長を鋭く指摘していること，などの諸点を高く評価したいのである。ただ氏は数次にわたって渡航した人々の史料を全部読んだわけでわなく，上記の意識変化の過程が大枠そういえても果して彼らの復雑な西洋観をそのように単純に類型化してよいのかという疑問が残る。また氏は使節団の人々の意識変化を幕末西洋観の転回の一環として見るも

のの，彼らの西洋観と当時一般の西洋観との関係についての言及が足りなく，それ故玉虫や福沢の意識の変化は唐突の感が与えられる。ところで使節団の西洋認識と表裏一体の関係にある彼らのアジア観とくに中国観については，氏は別の論文で詳しく分析している。それについて別稿で論じたいので，ここは省略する。（松沢弘陽『西洋「探索」と中国』北大法学論集第29巻第3の4号，『幕末西洋行と中国見聞』北大法学論集第38巻第5・6合併号）

ところで，松沢氏の上記の仕事を評価しながらも，違う視点つまり明治維新の改革そのものに直接に携わったことを重視するという政治史的な視点から，西南雄藩の使節団や留学生の対外意識を分析したのは犬塚孝明氏である（『明治維新対外関係史研究』吉川弘文館昭和62年）[6]。氏はとくに松木弘安（文久2年遣欧使節団のメンバー，後の外務大臣寺島宗則）を取り上げて，彼が渡欧中日本に差し出した五通の手紙を手がかりに，知西派官僚としての松木の対外意識を分析した。その結果氏は，文久2年渡欧した際松木がすでに「列強の権力政治的側面と国際間の相互性という西欧の国際関係を形づくる両面構造を正しく理解し，そしてその西欧体験，西洋理解がそのまま維新変革の際の事業に活かされた」と指摘した。つまりここで氏は，対外意識と対内意識との関係，対外観が国内変革の政治活動に与えた影響において松木を非常に高く評価している。さらに氏は，維新変革の政治的主体としての人々の政治的変革意識の成長過程を究明するために，単なる渡航した人々の対外観を分析するにとどまらず，まず彼らが抱く西洋認識の原点を幕末洋学派知識人たち（本多利明，渡辺華山など）の対外観に求め，そして慶応元年の薩摩藩遣英使節団を文久遣欧使節団の延長上にあるものとして捉え，統一政権樹立構想の形成と展開という視点からその近代的性格を解明し，彼らが西洋体験を通じていかにして統一国家へのヴィジョンを抱くに至ったかを追求した。この大きなスケール

の中で犬塚氏は西南雄藩の使節たちや留学生たちの対外観と政治意識及び政治行動との関連を分析することによって，彼らを明治維新史の中で位置づけ，彼らが日本の近代化に果たした役割とその政治的意義を評価した。氏のこのような小をもって大を見るという手法は見事といえよう。

ところで，使節団以来の遣外使節の最後にしてまた最大規模の岩倉使節団については，戦前では吉野作造，土屋喬雄などの研究があり，また戦後では大山梓，石井孝，芳賀徹，大久保利謙などの研究がある。[7] しかし土屋の産業史，芳賀の比較文化史の視点からの研究を除けばすべては条約改正問題に限定されている。岩倉使節団が19世紀後半の欧米で何をみ，どう感じたかまたその後の明治政府の政策制定とどういう関連を持っていたかについては全くといってよいほど注目されなかった。この欠点を補い，岩倉使節団の対外意識に初めてメスを入れたのは田中彰氏である。

氏は一連の論文の中で，[8] 岩倉使節団の公式報告書である『特命全権大使米欧回覧実記』を「明治以後の近代日本の対外観が凝集されて余すところがない」として重視し，それを使節団の対欧米，対アジア認識を中心に詳しく検討した。氏は岩倉使節団が視察を通じて得たものとして次の三つを指摘した。即ち(1)岩倉使節団は当時の欧米では大国と小国が存在したと考え，小国が大国の間にあって独立を全うすることができるのは単に軍事力だけの問題ではなく，国民が自主の原則を堅持することが大事だと認識したこと(2)使節団が最も関心を持っているのは米，英であるが，小国プロシアがいかに大国へとのし上がっていったかについてより強い興味を持ち，大国に対抗するには自らが大国になって力を持つ以外にないと認識し，アジアの中で小国から大国へそして力の論理を振りかざしたプロシアの道を選ぼうと決意したこと(3)使節団がアジアでの欧米人の蛮行を目に触れた時，アジアの人々に同情心を抱かず，かえって彼らに厳しい目を向けた，との三点である。明治日本の対外政策を想起すれば，氏のこの指摘

は大変重要な意味を持つものとわかるであろう。

以上総じて言えば，幕末維新期遣外使節の研究は，万延元年の遣米使節団，文久2年の遣欧使節団及び明治4年の岩倉使節団に集中しており，そのほかの使節団研究が殆どなされていない。[9] また使節団の対外意識の研究もまだ不十分といわざるを得ない。とくに対外意識の二つの側面即ち対西洋と対アジア意識の相互関係について往々に見落されているのが現状である。なお，多くの西洋渡航者の個人研究については，福沢諭吉研究が最も進んでいるが，[10] ほかの人の研究は今後期待しよう。

三

中国が西洋諸国に正式な政府代表を派遣したのは洋務運動のときである。同治5（1866）年清朝が徳川幕府より6年も遅れて初めてヨーロッパへ視察員を派遣した。旗人の斌椿と同文館の学生計5人であった。派遣理由は，アヘン戦争以来西洋が中国のことよく知っているのに，中国が西洋のことに非常に盲目的で対外交渉の失敗を重ねたからである。斌椿らに与えられた任務は，沿途諸国の「山川形勢，風土人情」を記録し清朝に報告すること，即ち「夷情探索」である。清朝が西洋について知る必要じ感じるには日本より2倍も時間がかかったが，それでも西洋に目を向けたという点で意味深いものであった。

そして2年後日本が明治維新を成し遂げた年に中国が初めての外交使節団を西洋に送った。天津条約の改約交渉のためであった。しかし中国が当時この大任に堪える人がいないため前駐清アメリカ公使浦安臣（Anson Burlingama）に依頼せざるをえなかった。中国人自身の遣外使節の出現は郭嵩燾を待たなければならなかった。

中国では10年前までの対外関係史の研究はほとんどすべて外交関係に集中していた。外交使節が外国でどのように観察し，何を感じたかについて

の研究は皆無であった。それは近代中国と外国との関係が侵略と被侵略の関係で，中国人民がこの「民族的矛盾」を解決するために闘ってきたためであり，また「文化大革命」が終わるまでは中国と西洋諸国は社会主義と資本主義，帝国主義との対立関係にあると見なされ，対外関係史研究も主に侵略と反侵略の歴史に焦点を合わせていたからである。ところが，1978年中国が対外開放政策に取り組んで以来，歴史研究の分野で中国人の対外意識の研究の気運が次第に生まれてきた。鐘叔河氏編纂の『走向世界叢書 From East to West）（全10巻岳麓書社1980年）がその最も大きな成果である。

本叢書は，アヘン戦争以後辛亥革命に至るまでの中国人の欧米，日本体験記を約30編集録している。外交使節だけでなく何らかの理由で西洋へ行った「士大夫」のものも含まれている。編集者の意図は，これら近代の中国人が閉鎖されていた社会から世界に目を向け，西洋社会に「真理」を求める実録を通じて中国人の意識変化 ── つまり天朝思想──→洋務運動──→維新変革の過程を辿ろうとし，そのことによって対外開放の重要性を訴え，現在中国で行われている開放政策を推進しようとするものである。

この叢書に収められている史料の多くは，最近発掘されたものでまだ本格的な研究が始まっていないが，編集者の鐘氏が各編に付けた解説だけからでも中国人の対外意識の変化の一斑を窺うことができる。

例えば，清朝によって派遣された初めての欧州視察員斌椿は仏，英，露など数か国を4か月間かけて巡遊したが，意識の変化があまり見られず依然として当時士大夫の一般的な伝統観念にとどまっている。しかし彼は欧州での見聞を通じ，西洋の近代的な物質文明に感心せざるをえず，また航海中に船で各国の旅客と出会い彼らを観察した結果「皆兄弟也」と認め，自分の所有している西洋人に関する知識のあり方に疑問を持ち始めたのである。

ところで，10年後の郭嵩燾に至ると中国人の西洋認識が大きく前進した。22才からすでに「洋務」＝外交事務に携わった彼は，独自の西洋観察を通じて西洋の富強論を説き，その根本は「政教」つまり政治制度にあるとの認識に到達している。さらに1876—79年駐英，仏公使に任命されて以来，彼の西洋認識は飛躍的な発展を見せた。彼は西洋の議会と選挙制度を考察した後，中国の「秦漢以来」の封建専制制度に批判の目を向け，「君民兼主国政」は「西洋所以享国長久」の原因だとの理解を示した。それ故彼は中国の封建士大夫が「天朝上国」の幻想をもって自己欺瞞し，西洋人を「夷狄」と見なす排外主義を厳しく批判し，「夷狄之民与吾民同」との主張を繰り返した。

さらに1890—94年英仏等四国駐在公使になった薛福成は，郭嵩燾の西洋認識を一層発展し，西洋富強の根本が「養民教民」だとし，中国の急務は「宜変古以就今」つまり西洋諸国の政治制度に倣い，封建専制政治を変革すべきだと主張し始めた。この彼の主張を鐘氏が「洋務から維新へ」と位置づけ，辛亥革命の前奏曲だと評価している。

鐘氏の研究のほかに，郭嵩燾，曽紀沢，薛福成など清末の遣外使節について最近いくつかの研究が出ているが，ほとんど解説的な性格のものでとくに注目すべきものはなかった。中でも曽紀沢がロシアとの談判の中で中国の国家主権を堅持した点はとくに高い評価が与えられている。

ところで，19世紀中葉から20世紀初期の中国人の対日観についての研究に特筆に値するのは王暁秋氏の『近代中日啓示録』（北京出版社1987年）である。彼はアヘン戦争，太平天国，明治維新，戊戌維新，辛亥革命などの重大な歴史事件における両国相互に与えた影響を論じ，とくに明治初期日本へ行った中国人の日記，遊記などの検討を通じて中国人が日本から受けた影響が大であることを考証した。ここでそれを詳論する余裕はないが，王氏の著作は中国人による中日両国の相互認識の研究の中で重要な位置を

占めている。[11]

さて，清末中国人の西洋議会制度理解については最近中日両国の学者によるいくつかの論文が発表された。溝口雄三氏は，欧米の議会制度が早くから出遊者によって好意的に紹介されていたことを論証し，[12] また呉忠民氏は，洋務派の西洋議会制度に対する態度に関する今までの二つの誤った見方を批判し，洋務派と維新派の議会制民主主義についての理解が根本的に異なったものと指摘しながらも，洋務派が西洋の議会制に賛成的な態度をとっていることを強調した。[13] そして袁鴻林氏は，外圧という特殊な歴史段階において自国のブルジョア階級が形成される以前，留学生や使節が資本主義思想を紹介しかつそれが一部分の人々によって受け入れられる可能性があると主張している。[14]

ついてだが，最近中国の史学界において洋務運動を再評価していることは周知の通りであろう。つまり洋務運動を完全に否定してしまうものからその積極的な側面を評価するものへと変わっている。[15] しかしそれらは洋務派の対外意識とあまり関連させていないため，その行動の原因の究明に至っていないといえよう。

以上概括すれば，中国での使節団研究が人々の注目を引いたばかりで，本格的な研究はこれからというところである。

四

周知のように，幕末日本から欧米へ多くの留学生が渡って行った。幕府によるオランダ，イギリス，フランス諸国への派遣のほかに，長州藩や薩摩藩などによる派遣，そして新島襄のような個人留学など様々のケースがある。彼らは深刻な対外的危機感をもって「夷の長所」を学ぶために欧米へ行き，造船，兵術，語学だけでなく，政治，社会など幅広く勉強し，近代日本に巨大な影響を与えた人を多く輩出させたのである。

石附実氏は，幕末から明治初半期の留学の特徴を集団主義的留学の体制であり，それを動機の側面からいえば，競争の意識によって促進されたと規定し，留学そのものを日本の対外的独立を達成し，国家的発展に資するものと評価した。さらに氏は，幕末留学の特色として，「留学国のあいだのアンバランスはありながらも，いずれかの特定国に集中することなく，あらゆる欧米諸国にわたった。そのことは，幕末，明治初年における日本人の西欧世界の多面的な観察とその理解を可能とし，世界像の多角的な把握に役立ったと言える。しかし同時にそれは，アジア世界を飛び越え，アジア文化を欠落した世界像であって，あくまで欧米文明への傾斜と偏りを示すもの」と指摘した。そして氏は，幕末留学がやがてきたるべき明治の西欧化への有力な道づけとなり，閉鎖的な日本が外に対して流動化に向かうきっかけの一つとなったとその歴史的意義を規定した。[16]

石附氏の研究のほかに，渡辺実『近代日本海外留学生史』（講談社1977年）倉沢剛『幕末教育史の研究』（吉川弘文館1983年）犬塚孝明『薩摩藩英国留学生』（中公新書1977年）宮永孝『幕府オランダ留学生』（東書選書1982年）などの諸研究がある。それらはいずれも留学生に関する概説的なもので，しかも幕末開国——→対外交渉——→文明開化といった歴史的な諸段階に沿っての留学生に関する政策的推移の記述である。これらの研究を通じて我々は留学生史の全体的な流れを容易に捉えることができる。しかし犬塚氏の仕事を除けば，[17] 個々の留学生についての具体的な追跡研究がほとんどなされておらず，留学生の西洋体験，意識変化の解明に至るにはまだほど遠い。かれらの異国における行動，意識変化を反映できるような史料の少ないことがその主な理由であろう。もちろん個々の著名人例えば伊藤博文，森有礼，五代友厚などの伝記史料を丹念に分析すれば，留学時代の意識変化や行動は多少分かるが，必ずしも十分ではない。

一方，中国の留学生研究も同じことがいえる。現在中国における留学生

研究の通説的なものは，李喜所『近代中国の留学生』（人民出版社1987年）を挙げることができよう。[18] 氏は中国の留学生の歴史を洋務運動期，19世紀末20世紀初，清末民（国）初，五・四運動前後の4期に分けてそれぞれの段階の歴史的な役割を分析し，近代中国の留学生史を愛国運動史として位置づけをしている。

中国のそれぞれの時期の留学生史についてもっとも多く研究されているのは，容閎によって進められていたアメリカへの少年留学である。1930年代の論文が多く，とくに容閎個人についての研究が多い。これはこの留学が中国ではじめてのものでしかも科学技術上中国に大きな貢献を与えたため重視されていると思われる。しかしこれも洋務運動の一環として研究され，留学生個人の具体的な研究はほとんどない。また個人研究ではほかにフランス留学の馬建忠，イギリス留学の厳復に関する研究がある。

ところで，中国から日本への留学生に関する最も古典的な研究は，実藤恵秀の『中国人日本留学史』である（くろしお出版1981年）。この本は中日両国の史料を多く引用しており，中国人留学生の日常的な活動及び日本側の態度を詳細に記述している。ただこれも通史であり，留学生の対外意識を知るには不十分である。中国でも近年留日学生を研究する論文がいくつかでているが，ほとんどこの域をでていないのが現状である。

以上みればわかるように，中日両国の留学生研究は，もっぱら政策史的な研究に集中しており，個々の留学生の追跡調査はまだ本格的に始まっておらず，未発掘の史料が多いように思う。現段階においてこれらの史料を発掘することが最も緊急な課題ではないかと思う。

五

これまで19世紀中葉中日両国の対外意識に関する研究を概説してきたが，遣外使節と留学生研究に限って言うならば，日本のほうがより進んでいる

が，なお多くの課題が残されている。まして両国の比較研究となると皆無に近いといえる。

冒頭にいったように，中日両国は近代において非常に異なった道を歩んできたが，それは単なる両国の政治体制や国際環境などのちがいだけからは説明しきれない多くの問題が含まれている。むしろ対外意識の相違はこの差異を解くキーポイントになるのではなかろうか。両国の対外意識の特徴を比較研究し，「差異性の中に潜む同一性，同一性の中における差異性の展開」[19] を認識することによって両国の近代化の差異の原因はより明瞭に現れてくると信じている。

注

1) 毛沢東『実践論』

2) 芝原拓自「対外観とナショナリズム」（『対外観』解説　日本近代思想体系岩波書店1988年）p 458

3) 中日両国の対外意識の比較に関しては植手通有氏の優れた先駆的な研究がある。『日本近代思想の形成』（岩波書店1974年）がそれである。この中で氏は中日両国の対外観の基礎をなす華夷思想の歴史的，社会的背景の違いを分析し，その差異を中国の「天下」観念と日本の「国家」観念，そして中国の優れた文化的優越感と日本の政治的軍事的性格として指摘している。

一方，中国の日本史研究者呂万和氏は近代中日両国の歴史的分岐点を1720年康熙帝が禁教令を下し，徳川吉宗が禁書令を緩和したところに求めようとしている。彼によれば，1720年以後中日両国における洋学＝西学伝播状況の差異は両国に西洋列強の武力侵略に臨んだとき非常に異なった思想的基盤を持たせたのである。言い換えれば，江戸後期洋学の長期にわたる流布は幕末日本の志士と先進分子に欧米資本主義国家の経験を吸収する能力を与え，日本を指導して「維新」に向かわせることを可能にした決定的な要素である。逆に晩清の中国は西学の長期にわたる中断により，この決定的な社会的条件を失って「維新」のチャンスをも失った，ということである。氏のこの指摘はそれまでの比較研究の盲点を探り，高く評価されなければならないと思う。（呂万和『明治維新と中国』六興出版1988年）

なお，中日の近代化に関する比較研究は依田熹家『中日近代化比較研

究』（上海三聯書店1988年）や馬家駿，湯重南『日中近代化の研究』（六興出版1988年）などがある。

4）日本は西洋国ではないが，清末の中国人は日本の明治維新の成功を見て実質的に日本を西洋国と見なし，故に日本留学も西洋に学ぶ最も有効な手段と考えていたようである。

5）芳賀氏は『大君の使節 ── 幕末日本人の西欧体験』（中公新書昭和43年）『明治維新と日本人』（講談社学術文庫昭和55年）の中で一連の使節派遣を「西欧世界の衝撃に対する日本の返答」であるとして，文化史的見地から研究を行った。氏は使節，随員たちの日記，書簡その他の文献から彼らの近代的性格を読み取ろうとし，また使節団の「夷情探索」を通じて得た新知見を「いくつかの試行途上の施設として，空中に漂う様々の改革のアイデオとして著述の形による実際的な世界知識と啓豪思想として，そして何よりも蓄積された経験と訓練を経た人材として，徳川から明治の新日本に遺贈されていった」と高く評価している。

6）犬塚氏は，松沢氏が福沢の政治思想を高く評価しすぎたことに不満を持ち，氏の研究対象である福沢諭吉の近代の意識を強調するあまり，使節の近代的意義が福沢にのみ集約されているが如き感を与えることは否めない」と批判している。

7）大久保利謙著『岩倉使節の研究』（宗高書房昭和51年）に岩倉使節関係の研究文献目録が載っている。

8）主なものは『特命全権大使米欧回覧実記』解説（岩波文庫1979年）『近代天皇制への道程』（吉川弘文館1979年）『岩倉使節団 ── 明治維新の中の米欧』（講談社現代新書1981年）がある。

9）多くの論者が一様に指摘したのは文久の渡航と福沢の政治意識との関係である。例えばひろたまさき氏は福沢の洋行が「遠く太平洋を隔てたところから日本を対象化させるとともに，日本全体の運命に目を見開かせずにおかなかった，つまり彼における国家意識の登場である」と分析した。（ひろたまさき『福沢諭吉』朝日評伝選昭和51年）

10）幕末維新期遣外使節の研究はほかに例えば鈴木明『維新前夜』（小学館1988年），宮長孝『文久二年のヨーロッパ報告』（新潮選書1989年），吉田光邦『両洋の眼』（朝日選書1978年），泉三郎『明治四年のアンバッサドル』（日本経済新聞社昭和59年），藤井哲博『咸臨丸航海長小野友五郎の生涯』（中公新書昭和60年），須見裕『徳川昭武』（中公新書昭和59年）などがある。

11）なお明治初年参事官として赴日した黄遵憲の対日観についての研究が近年

盛んであるが，その中に盛邦和氏の『黄遵憲史学研究』（江蘇古籍出版社1987年）が一見に値する。

12） 溝口雄三「光緒初期の議会論」（『近代中国』厳南堂書店第21巻1989年）

13） 呉忠民「略論洋務派対西方議会制度的認識」（『史学月刊』1985年第4期）

14） 袁鴻林「再論誰在中国最早提出君主立憲」（『史学月刊』1985年第4期）

15） 例えば李時岳『従閉関到開放』（人民出版社1988年）

16） 石附実『近代日本の海外留学史』（ミネルヴァ書房昭和47年）p 296

17） 犬塚孝明『明治維新対外関係史』（吉川弘文館昭和62年）

18） 舒新城『近代中国留学史』があるが，入手困難なため私はまだ読んでいない。

19） 芝原拓自前掲論文

附　この論文は廣田昌希教授，陶徳民氏のご指導ご助言をいただきました。記して感謝いたします。

（大学院後期課程学生）